

被災者と短歌

福島の歌会に寄せられた「思い」を追って

ルポ

巨大地震と大津波、そしてあの原発の災いは、私たちの心に多くのものを刻み込んだ。まして被災の当事者となれば、その心を揺るがしたものの大きさや重さはいかばかりだろう。極限状況の下で言葉を紡ぎ始めた人々の〈短歌〉に込められた「思い」を追って、『ホームレス歌人のいた冬』の三山氏が〈被災者歌人〉たちを訪ねた。

三山 喬

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。東京大学経済学部卒業。朝日新聞記者を13年間務めたのち退社し、南米ペルーを拠点にフリー記者として活動。2007年に帰国。著書に『日本から一番遠いニッポン』などがあり、今年小社から刊行した『ホームレス歌人のいた冬』は大好評を博している。

被災者自身が詠む歌の「重み」

被災地に暮らす短歌の愛好家たちは大震災以降、いったいどのような思いで歌を詠んでいるのだろうか……。そんなことを考え始めたのは、あ

の大惨事から約ひと月後、全国紙の歌壇欄に震災の歌が並び始めた頃だった。

戦後最大の国民的惨事、と言ってもいい事柄の性質上、このテーマで作品を詠み、投稿する人はもちろん、全国に及んでいる。だがやはり、東

北沿岸部で実際に被害を受け、避難生活を体験した当事者たちの作品は、その言葉の重みが違うように感じられた。

私にとつての「3・11」は、昨夏から本誌に連載した『ホームレス歌人のいた冬』を単行本用に全面改稿

し終えた、まさにその翌週の出来事であった。「絶望的な極限状況の中で紡ぎ出す言葉」という意味合いでは、震災短歌への関心は、「ホームレス歌人」について知りたい、と思つた感情の延長線上に芽生えた、とも言えるものだった。

フリーの雑誌記者という職業柄、それ以降、数カ月間に受注した仕事は、震災関連の取材がほとんどで、被災地に足を運ぶ機会には事欠なかつた。福島で、ある短歌結社の歌会が開かれる、という話は、そうした日々の中で耳にしたことだった。

第十四回・新アララギ福島会の歌会。小雨の降る初夏の日曜日、私は他の取材の合間に、会場をのぞいてみることにした。

新アララギは全国規模の結社だが、都道府県単位にも支部組織があり、福島でも年一回、県内外の会員が集

う歌会が催されてきた。今年は震災の影響から開催を危ぶむ声も出ていたが、関係者らは当初の予定通り、福島市内のホテルを会場に、開催に踏み切つた。

参加者は四十人余り。事務局の今野金哉氏は「震災で多くの公共施設が損壊したこともあり、県内では俳句の大会などさまざまな文化的な行事が中止されています。私たちは一貫して開くつもりでしたが、蓋を開けてみればやはり、浜通り地方の会員は欠席が目立ちます。それでも今回は、県外の会員が『福島を応援しよう』と数多く参加してくれて、歌会そのものは、例年並みの規模で開くことができました。本当にありがたいことだと思っています」と説明した。

「相双地区」を含む地方である。原発から三〇キロ圏内の住民は、今もなお、終わりの見えない避難生活を続けている。避難対象の区域外に暮らす会員でも、県都福島市まで足を延ばす余裕がなく、歌会に作品は提出したものの、出席を見送つた会員が少なからずいた。

放射能……気がかりな日々の中で

歌会では各人が二首、事前に作品を提出し、それぞれに無作為に割り当てられた一般の会員と講師役の歌人・雁部貞夫氏が順々にそれを批評してゆく。作品は計八十八首、四十四人分に及んでいた。会場で配られた冊子で数えてみると、震災にまつわる歌は、うち五十六首に及んでいた。

「放射線量は広い屋根を伝って雨水